

## 至仏山春スキー行

酒井 利直

至仏山(2,228m)は誠に良い山である。私が良い山と考えるのはまず「形が良く堂々としていること」「登って楽しいこと」そして「名前が良いこと」である。至仏山はこの条件を全て満たしている。名前についていえば、深田 久弥は「日本百名山」の中で至仏は山頂から北東へ流れるムジナ沢の別称渋沢(シブツツアワ)が転じたものではないかと推測しながら「そんな詮索はさておき、至仏山とはいい名前である。文字もいいし、発音も良い。文学的でもある。」と続ける。

さて至仏山は春スキーのメッカであり上記のムジナ沢も人気の滑降ルートの一つである。そして我々も初日にこのムジナ沢を滑った。ゴールデンウィークになると通常鳩待峠まで車で入ることができるようになるので、山スキー愛好者が大量に押しかけるのだ。ところが年によっては残雪の状況からゴールデンウィークに車が入らないことがある。雪の多い今年に入山直前まで車が通るかどうかがヤキモキしていたが無事車で入山。

今回は山岳部 OB の中川君・大竹口君の誘いに応じ会社の同僚宮本君と4人で1泊2日の至仏山春スキーとなった訳だが、天気・メンバーの足並みに恵まれかなり満足度の高い山行だったと言えるだろう。

2005年4月30日(土曜日)快晴

朝5時半前に西東京の自宅を宮本君の車で出発。連休2日目の故か道路は空いていて順調に関越道路を北上する。赤城高原SAで中川・大竹口両名(中川車)と合流。戸倉から鳩待峠に向かう道に入ったところで「鳩待峠は満車なのでこの駐車場に車を泊めてバスで往復してくれ」と言われる。車の駐車代は1日1,000円、鳩待峠までのバス代が900円である。一方鳩待峠の駐車場は1日2,500円であるからべらば一な話でもない。そうこうしながら9時過ぎには鳩待峠に到着。午前9時30分頃シールをつけて至仏山に向けて出発。2,30分登ると樹林が疎らになり至仏山の頂上と明日滑る予定のワル沢が正面に見えてくる。全員一斉にカメラを取り出すところだ。



午前11時20分悪沢岳と小至仏山のコル~地図ではオヤマ沢田代とある付近~に到着。左の写真の正面は小至仏山の頂上で至仏山本峰は右奥である。大部分の人は小至仏山をトラバースしている。我々もトラバースを選び午後0時15分至仏山頂上に到着。頂上には2,3歳の子供を含めて目の

子25人程度が憩っている。山スキーヤーの他、ゲレンデスキー派や若いスノーボーダーの連中もいる。暫く昼食を取りながら周囲の山を眺める。北方には越後駒ヶ岳から中ノ岳から平が岳に通じる雪の聖域が広がっている。35年程前の春は3月、みぞおちまで雪に埋まるラッセルで枝折峠から駒ヶ岳を越えたことや嵐のため中ノ岳で数日雪洞に釘付けになったことなどが思い出される……

東に目を転じれば一昨年宮本君と春スキーを楽しんだ燧ヶ岳と会津駒ヶ岳が見える。西に目をやれば谷川岳やその手前の白毛門から朝日岳を経て巻機山に北上する真っ白い稜線が見える。「あれは来年の課題だ……」などと話しながらしばしの休息を終えた。

さていよいよムジナ沢の滑降である。ムジナ沢は頂上から北東に下る沢だがまず東に伸びる尾根を少し下ってから北へ伸びる尾根に向かって左にトラバースする。ところがトレースを追ってしばらくトラバースして行くと傾斜が急になり、雪が切れているところに入る（左の写真）



ここで一旦スキーを外し、20m程ハイマツ・露岩帯を下ってようやく雪の大斜面にでた。

ここからは一気に下るのみ。「滑降場面の写真を撮る」という宮本君が先に滑り、後は適宜

滑り出す。雪はザラメでエッジが少し流されるが、板が引っかかることはなく快適なターンを繰り返し、30分程で約半分の行程をこなしてしまう。さて中間地点から真直ぐムジナ沢を降りると今夜泊まる至仏山荘のある山ノ鼻より500m程西に出てしまうことになる。そこでムジナ沢から夏道のある尾根筋に向かって東にトラバースする。尾根筋は樹林帯であるが、そ



れ程密度は高くなく難なくスキーで下ることができる。午後1時40分頃尾瀬ヶ原着。ここでしばらく滑降の余韻を楽しんでから至仏山荘に入りビールで乾杯した。

なお山荘は風呂もあり(ただし石鹸の使用は禁止)3時から入浴可で一風呂浴びる。その後水芭蕉を探しながら小屋の周辺を散策し



て、酔いを醒ましながらか夕食時の第2ラウンドに備えた。(上の写真は尾瀬ヶ原から見た遅い午後の燧ヶ岳)

至仏山荘の宿泊代は個室利用で一泊 8,500 円、夕食は凄く美味しいという程ではないがまずまずで朝食は美味だと思った。午後9時の消灯時間近くまで山の雑談をサカナに酒を酌み交わす一夜だった。

5月1日(日曜日)晴

午前6時起床すぐ朝食。中川君・大竹口君は所用で直ぐ下山するが、酒井・宮本組は少し時間の余裕があるので、ワル沢を滑って帰ることにする。以下は酒井・宮本組の行動概要である。

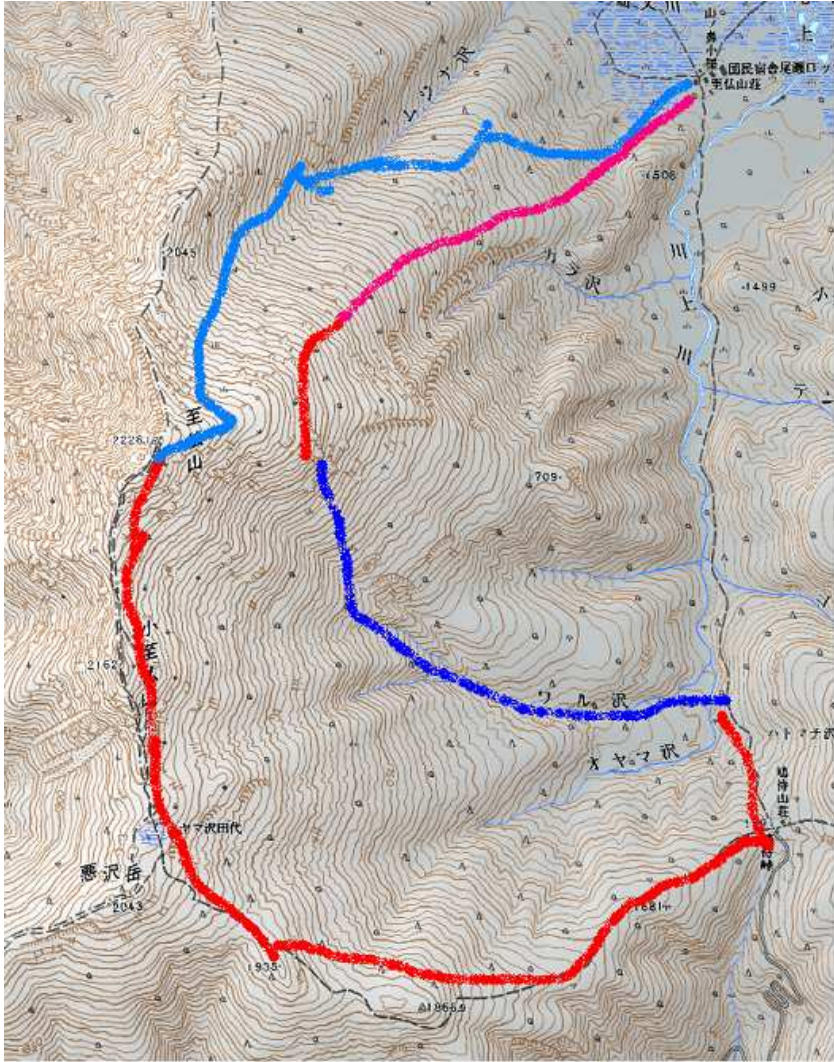
午前6時40分頃先に出発する中川・大竹口組を見送ってから、シールをつけて出発。暫く夏道のある尾根の北側の浅い沢を登り、やがて夏道のある尾根にでる。樹林帯を過ぎると傾斜がきつくなりシールで直登が苦しくなる場面が出てくる。特にフリーベンチャーというショートスキーを履いている宮本君は苦戦してとうとうスキーを脱いでツボ足で登り始めた。登り始めて約2時間午前8時半頃標高2,000mを少し超えた地点に到着。ここから少しトラバースするとワル沢の上部に出ることができる。至仏山の頂上は昨日踏んだので今日は割愛しここから滑降することにした。さてワル沢だがムジナ沢のように岩・ハイマツが出ているところもなく一気に思う存分の滑降を楽しむことができる。傾斜があるのは標高1,600m地点まででそこからは傾斜の緩い谷底を滑ることになる。2,3ヶ所小さな滝壺が顔を見せているが大体滝の左岸を難なくトラバースする。しかし雪が少ない時は注意する必要があるだろう。約30分の滑りで鳩待峠・山ノ鼻を結ぶ一般道にでた。出たところには川上川を渡るスノーブリッジがあり10分程雪道を辿って9時40分頃鳩待峠着。乗合バスの正規の出発時間は約1時間後の10時50分であったが、下山者が4人揃えば「バス料金にてタクシーを出す」ということでしばらく待っていると中年男性二人組が来た。聞いてみると猫又川上流に泊まって平ヶ岳を往復してきたとのこと。元気なおジサン達である。かく言う私も元気かどうかは別としておジサン以外の何者でもないのだが・・・10時15分頃タクシーに乗り、鳩待峠を後にした。

至仏山スキー登山のための若干のアドバイス

- この時期一般的にはピッケル・アイゼン不要
- ムジナ沢の上部はハイマツ・岩が出ていた。後講釈であるが山ノ鼻に下る夏道のある尾根筋を滑った方が早いだろう。ただし尾根の中間地点は沢筋より傾斜がきつい。
- ワル沢は頂上から終点川上川まで一気に滑ることができるので豪快である。もし至仏山からの滑降ルートを一本だけ選べと言われれば私はワル沢を選ぶ。
- 夏道の南側の沢(カラ沢)は傾斜があって面白そうだが、ただし寡聞にして滑降記録は見たことがない。

以上





赤線が登りのルート。青線がスキーで滑ったルートである。